

Japan DRLs 2020改訂の概要と被ばく線量管理・記録の動向

企画協力：奥田保男 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構情報基盤部部长
神田玲子 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所放射線防護情報統合センターセンター長

2020年7月3日、医療被ばく研究情報ネットワーク（J-RIME）から、わが国の最新の診断参考レベル（diagnostic reference level：DRL）を示した「日本の診断参考レベル（2020年版）（以下、Japan DRLs 2020）」が示されました。Japan DRLs 2020では、新たにX線診断透視を加えるなど、大幅に内容が見直されています。また、2020年4月1日から診療用放射線に係る安全管理体制として、X線CT、血管造影、核医学検査の線量管理・記録が義務化されました。そこで、本特集では、Japan DRLs 2020策定の経緯や各DRLの概要、線量管理・記録とそのデータ活用について取り上げます。

I Japan DRLs 2020改訂の経緯と今後の展望

1. Japan DRLs 2020改訂の経緯と今後の展望

赤羽 正章 国際医療福祉大学医学部放射線医学

「日本の診断参考レベル（2020年版）（通称、Japan DRLs 2020, DRLs 2020）」が制定され、7月3日付けで公表された。詰めの段階こそ新型コロナウイルス感染症による制限に悩まされたものの、おおむね順調に改定作業を進めてほぼ予定どおり公表できたことは、関係各位のひとかたならぬご尽力の賜物である。心よりお礼申し上げます。

わが国の診断参考レベル（diagnostic reference level：DRL）は、2015年に初めて制定された。主査をお務めくださった細野 眞先生の下、試行錯誤しながら初めての作業に取り組み、多くの関係学

協会が力を合わせて成果を挙げたことは、DRL制定自体もさることながら、放射線防護のオールジャパン体制が築かれた点において画期的な出来事であった。同じ体制にて今回の改定が成し遂げられたことで、今後もこの体制に基づいてわが国のDRL改定作業を継続できるものと確信するところである。

改定の経緯

今回の改定作業は、2017年の医療被ばく研究情報ネットワーク（以下、J-RIME）総会における議論を受けて、

2017年12月にDRLワーキンググループ（以下、DRL-WG）を開催するところから始まった。折しもDRLに関するICRP Publicationの改定版であるPublication 135が刊行され、より理解しやすくなった記載に助けられて改定作業を進められたのは幸いだった。DRL-WGでは、DRLs 2015の普及の程度や効果、次回改定へ向けた線量調査や追加項目検討作業など、多くの貴重な情報を各学協会が持ち寄って、有意義な議論が行われた。改定作業には少なくとも2年必要であろうこと、Publication 135にDRLは3～5年間隔で改定されるべきと記載されているこ